「語りあえば心ふれあう」

山崎俊一校長先生に聞く

――そもそも、子供たちに民話や昔話を聞いてまとめさせた理由は何ですか。

山崎「冬休みですので子供たちも家にいることが多いだろう。家の人もいます。黒鳥は幸いなことにおじいさんおばあさんがいる家が多いので、昔の話や民話などを聞かせたらどうか。」

「今の子供たちはあまりに忙しすぎて、遊んだりする時間がないんですよ。そして、家庭で話をする時間が少ないですね。だから、話をさせるということもありました。」

「国語の勉強、民話や郷土の古い話を知ること。そして家庭で団らんを持つことですね。」

――だいぶ、欲張った宿題ですね。原稿にまとめるなんてたいへんだったんじゃないですか。

山崎「いえ。子供たちに聞くと、おもしろかったって言ってます。初めて、こんな話を聞いたって子も多いですね。」

「私が子供のころ、おばあちゃんのふところで話を聞いたものです。そんな体験のある人は今の三十代ぐらいまでででしょうね。」

「今、民話を集めておかないと、だれも知らなくなってしまいます。」

――原稿の内容はどうでしたか。

山崎「おばあさんから聞いた人が多いんですが、おばあさんの出身地によって話が違うんですね。つまり、木場とか大野とか白根市とかから来た人はそこの土地の話を知っているということです。」

――聞かれたおばあさん方も嬉しかったんじゃないんでしょうか。

山崎「そうでしょうね。社会全体があまりにも忙しすぎて、やすらぎが家庭にも失なわれています。この宿題が、一時の団らんに役立ったならよかったと思います。」

山崎先生は、以前下田村に赴任された時、地元の民話集を出版されたこともあります。

つぶのおよめさん

黒鳥小六年　白井孝子

むかしむかし、いなかにおじいさんとおばあさんがすんでおりました。子供がいないので、たいへんさびしい日を送っておりました。ある日二人は、相談をして神様にお願いして、子供をさずけてもらおうと、お願いにあがりました。二人は手を合わせて、「どんな子供でもいいから、つぶのような子供でもいいから、おさづけ下さい。」といっしょうけんめいお願いしました。

いく日かたったある夜、目をさましたら、つぶの男の子が、まくらもとにおりました。おじいさんとおばあさんは、大へんよろこんで「これは神様のおさづけだ。」とかわいがってそだてました。人間とちがってつぶなので、近所の子供はだれも遊んでくれません。学校もいかれません。それでもつぶは二人にかわいがられて、とうとうおよめさんをもらうとしごろになりました。おじいさんもおばあさんも心配で「つぶや、お前も年ごろなのに、およめさんにくる人がいない、お前がかわいそうでなりません。」と、なみだをながして言いました。するとつぶは「おじいさんおばあさん、心配はいりません。私は、村一の花よめさんをもらってきます。」といってでかけました。つぶはころころ、ころころ、ころがって村のしょう屋のお家へ行きました。そしてしょう屋のお父さんとお母さんにお願いしました。

「おたくのむすめさんをぼくのおよめに下さい。」とお願いしました。するとしょう屋の父母はびっくりして「だいじなむすめをつぶのよめなんかにやれない。」と大へんおこりました。するとつぶはころころころがって、むすめさんのほっぺたにくっつきました。むすめさんはたまげて「いたい、いたい、つぶが私のほっぺたにくっついた。とってください。」と泣きさけんだ。みんなは、びっくりして、つぶをとろうとしますが、つぶは、ほっぺたからはなれません。しかたなく神様にお願いしました。

「つぶがむすめのほっぺたにくっついてとれません。どうかとって下さい。」とお願いしました。すると神様は「つぶのおよめさんになればすぐとれます。むすめをつぶのおよめさんにやりなさい。」とおっしゃいました。しかたなくむすめは、つぶのおよめさんになりました。おじいさんとおばあさんは、大へん喜んで、およめさんをむかえました。いく日かたって、およめさんは、つぶと一緒に里帰りをしました。しょう屋のお父さんもお母さんもやさしく二人をむかえましたが、なんとかしてつぶをころそうと思いました。

そしてつぶをふろに入れて、がらがらふろをにたててつぶをころしました。少したってふろのふたをとってみると、今ごろ赤くなって死んでいると思ったのに、それは、村一番のりっぱなおむこさんになって死んでいました。

聞いた人、おばあさん

（批評）

はじめて聞いたお話です。おもしろく書かれています。ていねいに終りまで書いた努力はたいへんなものです。おばあさんはまだまだいろいろ知っておられると思います。機会があったら聞いてみると良いですね。

納税でみんなの豊かな町づくり（黒中3の5　田中俊行）

第一回町民卓球大会

さわやかスポーツの汗

黒鳥チームが優勝

▲体育館が狭い？

▲"全勝"の保刈智恵子さん　黒鳥チーム優勝の立役者

子供も、若者も、大人も、みんないっしょになった大会。それが、第一回公民館分館対抗町民卓球大会でした。

この大会、昨年、一昨年と行われた大会と違うのは、公民館分館対抗にした点。

「今まで愛好者や一部の人たちだけしか参加しなかった。それで分館対抗という形で、子供からお年寄りまで出れるようにしたかった。」（関係者談）からだそうです。

そして、それは大成功。チームの編成メンバーは、小学生男女、中学生男女、一般男女、四十歳以上男女、フリー一名の九人。参加したチームの多くは、大会二週間も前から夜遅くまで練習し、「鍛えに鍛えましたよ。チームワークもバッチリ」という"最強チーム"を自認し、公言していました……。

さあ、いよいよ大会。

時は二月七日の日曜日。

場所はおなじみ総合体育館。

天候も大会を祝ってか快晴。

一歩、館内に足を踏み入れますと、熱気と歓声が。参加二十チーム。応援団も含めますと、四、五百人はいるでしょう。

大会は、予選リーグと決勝トーナメントに分かれ、予選リーグでは、四ブロックに別れての総当たり戦。いずれも大接戦の末に、山田B、金巻C、木場、大野B、金巻A、島原本村、黒鳥、立仏ホワイトドリームの八チームが決勝に進出

なお、「残念ながら…チーム」は大野A、C、板井、山田A、C、D、金巻B、立仏ゴールデンメロディ、立仏レッドピット、寺地団地、蓮方団地、小平方でしたが、いずれもたいへん満足そうな顔でした。それも当然、スポーツの汗はいいものなのです。

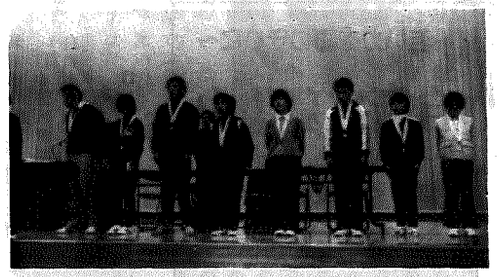
決勝トーナメントの優勝決定戦では、「黒鳥と山田が強いんじゃないか。」との"下馬評"どおり黒鳥と山田Bが対戦。大接戦の末に五―四で黒鳥チームが初の栄冠に輝きました。予戦では山田Bが勝利していましたが、その雪辱に成功したわけです。特に、小学生女子の保刈智恵子さんと"現役"高校生の大岩秀男君の活躍が光りました。また、山田Bチームとともに、あと一歩のところで黒鳥チームに敗れた立仏ホワイトドリームの健闘もたたえられるでしょう。三位は金巻A、敢闘賞は木場でした。

朝八時から始まった大会も、夕方四時過ぎに閉会式を迎え、各チームの表彰。野崎太平一公民館長から「勝つも負けるも運しだい…」という"心やさしい言葉"が贈られました。最後に、この大会を主催した黒埼町卓球連盟副会長の浅妻敬次郎さんは「黒埼町の卓球レベルは実に高い。県レベルの人も多いし、子供たちは特に素質があるようです。今後は、ジュニア育成にも力を注ぎたい。」との講評があり、大会のすべてが終了しました。

体育関係者からは「この大会ほど盛り上がって成功したのも少ない。」という声も聞かれ、卓球連盟の太田喜一郎さんも「やっぱり、子供からお年寄りまで参加できたことで成功しました。」と話しています。裏方の卓球連盟の努力も忘れてはならないでしょう。

参加したみなさんは、参加賞のテッシュペーパーを持って、お昼過ぎから降り始めた雪の中を家路につきました。体には心地よい疲れが、心には楽しい思い出が残ったことでしょう。

▲優勝おめでとう　黒鳥チーム



▲惜しくも準優勝　出田チーム

税金で住みよい生活　明るい未来（3の5　高橋望）